

〈巻頭言〉

おもちゃを抱えて還暦を迎えた子どもたち

今部 一良

今の私を知る人は誰も信じてくれないのですが、幼少の頃の私は頻繁に高い熱を出して、往診を頼んでもいないのに医者さんが自宅に様子を見に来るほどの病弱な子どもでした。

小学生の頃、例によって発熱して受診した医院からの帰り道、おもちゃも売っている行きつけの駄菓子屋さんで「超〇金」というずっしり重いロボットを買ってもらったら、嬉しくてたちまち熱が下がったのを覚えてます。まさに「病は気から」でした。

当時、おもちゃは純粋に子どもだけのもので、プラモデルにしてもレゴ(ブロック)にしても、親たちは全く関心がなかったように思います。そもそも戦中・戦後の混乱期に育った親世代は、おもちゃとは無縁だったのかもしれない。

それから幾星霜、おもちゃに囲まれて育った私たちが親世代となり、還暦を迎えている今、おもちゃは子どもだけのものではありません。子どもそっちのけで大人が夢中になり、おもちゃ自体も昔では想像もつかないほど進化しています。巧みにゲーム機を操作する子どもを見てみると、現代っ子は遊ぶのも大変なのだあと、羨ましいのか気の毒なのか分からなくなります。

2024年1月20日に月面に着陸した日本初の超小型の変形型月面ロボット LEV-2 (SORA-Q) の開発には玩具メーカーが関わっているそうで、原寸大で変形もして本物と同じ走行機能を持つ SORA-Q が販売されています。宇宙開発におもちゃの技術が活用されているのは本当に凄いことだと思う一方で、おもちゃがこれ以上大人の世界に取り込まれていいのか、今一度おもちゃを子どもたちの許に取り戻さないといけないのではないかと心配するもう一人の自分がいたりします。

インベーダーゲームに熱を上げていた当時の私たちには高度で複雑な現代のゲーム機は想像できなかったように、現代の私たちには20年後のゲーム機がどうなっているのかなんて全く想像もつきません。映画に登場するような空中を浮揚するボードが実用化されることはさすがにないと思いますが、物理の法則に反するもの以外であれば何が起きていても不思議ではありません。もしかしたら、おもちゃという概念自体がなくなっているかもしれませんね。

未来の子どもたちはそれをどう受け止めるのか…余計なお世話かもしれませんが、見てみたいものです。

こんべ・かずよし
(神奈川県立川崎図書館長)

刊行にあたって

本年は神奈川県まなびや基金の寄附金で理工系の入門書を充実させたり、株式会社タカラトミーの企画により当館が「SORA-Q」の公式アンバサダーに任命され、館内で「SORA-Q Flagship Model」を展示したりと、新しい取組みを行いました。当館は、専門的図書館として調査研究への寄与に努めていますが、一方で初めて工学・産業技術・自然科学に触れる方や、青少年の皆様も多くいらっしゃいます。これをきっかけに、より多くの県民の皆様にも、科学技術に親しみを持っていただければ幸いです。改めて、当館の運営にご協力いただいた皆様に感謝申し上げます。

(編集担当)